

ブルーメンベルクにおける「非概念性の理論」と「隠喩学」

下田和宣 (しもだ・かずのぶ)

はじめに 楽園追放の思考

- ◆ドイツ文化哲学の伝統に共通の問題意識
= 「楽園への扉は閉ざされている」(実体的真理への直接的な接近の断念・離脱)。そこからいかに、何を思考する道がなお残されているか。
- ◆ジンメル、カッシーラーが代表的だが、ハンス・ブルーメンベルク (Hans Blumenberg, 1920-1996) も重要な位置を占める。
- ◆ブルーメンベルクの著作は特異な思想史記述からなるものがほとんどであり、その狙いがどこにあるのか見えづらい。
→ 本発表ではとくに、1970 年代 (中期) の展開に着目し、その核心を探る。

1. 知られざる人間学——2000 年代後半以降の研究の展開と問題

- ◆ブルーメンベルク「現象学的人間学」の発見：遺稿集『人間の記述』¹ (2006 年) とミュラーの先駆的研究²を起爆剤とした研究の活性化。
- ◆新たな問題：人間学的考察と思想史記述の関係をどう捉えたらよいか。基礎と応用？
- ◆考察の手がかり：1970 年代末に語られた「転回」。人間学的考察に取り組み始めた段階で、ブルーメンベルクは思想史記述を含めた自らの仕事全体を「非概念性の理論 (Theorie der Unbegrifflichkeit)」というタイトルで包括しようとする。そこに人間学へと必然的に流れ込む思考の道筋が理解できるのではないか。
- ◆考察の手順：まず前期の仕事の概要と問題意識を、1960 年『隠喩学のためのパラダイム』を軸に確認。続いて 1975 年夏学期講義「非概念性の理論」を検討し、前期の問題設定との接続について考察する。最終的に 1979 年『難破船』付論「非概念性の理論への展望」を対象とし、独自の文化哲学的思考の可能性を定式化する。

2. 思考の背景——概念史の補助学としての「隠喩学」

- ◆1960 年『隠喩学のためのパラダイム』のポイント (序論より)
 1. 位置づけ：リッターやロータッカーなどによる「概念史」プロジェクトに対する、批判的・補完的作業としての「隠喩史」。
 2. 絶対的隠喩 (absolute Metaphern)：副次的・残滓的装飾ではなく、「哲学的言語の根本要素」(PM 14)。「絶対的」とは概念に還元されない自立性を持ち、独自の歴史的展開を備えている、ということの意味する。
 3. 隠喩使用は概念的思考の「下部構造」として背景的に機能する。だとすれば哲学言説における隠喩使用の歴史をたどることは「歴史的意味地平と視覚様式そのもの

¹ Hans Blumenberg, *Die Beschreibung des Menschen*, Suhrkamp, 2006.

² Oliver Müller, *Die Sorge um die Vernunft: Hans Blumenbergs phänomenologische Anthropologie*, Mentis, 2005.

のメタ運動論」(PM 16)となる。

→ここで隠喩史の記述が哲学的中心性を獲得。概念形成の現場としての隠喩使用。

3. 1975年夏学期講義「非概念性の理論」の意義

◆ミュンスター大学での講義。2007年に公刊。

◆いわば人間学的概念論。概念の形成と使用を、非概念的なもの(隠喩に限定されない)との連関において把握する。「距離を取ることによる知覚(perceptio per distans)の器官」(TU 75)としての概念。

◆文脈をかく乱するものとしての隠喩(TU 61):概念形成とは異なる隠喩の機能

→隠喩使用は概念形成という側面に限定されない。

4. 1979年『難破船』「非概念性の理論への展望」の位置

◆隠喩学はもはや概念史の補助ではない。生活世界論への接続。

◆講義と比べ、概念論は前面化していない。

◆隠喩に対する新たな規定:

1. 語りうるものと語りえないものの「限界・境界」(SZ 94):「語りえないものについては沈黙しなければならない」(ウィトゲンシュタイン)という提言に反し、語りえぬものについての語りへの努力と欲求は歴史的に重ねられてきた。その痕跡が哲学者の用いる隠喩である。

2. 「理論的好奇心のプロセスが持つ太古の層を指す示準化石」(SZ 87):隠喩は哲学的・科学的欲求の背景である。

→隠喩学の深化:概念形成の前段階という補助的な位置づけをこえて、さらにその奥にあるような、学問的営為を駆り立てるものそのもののダイナミズムを示す指標としていまや捉え直される。

おわりに 迂回を肯定するために——人間不在の人間学へ

◆「我々が学問についてのまさにそれという真理を期待することができないということをもう認めなければならないとしても、いまや知ることの失望に結びついているものをなぜ我々が知ろうと欲したのか、我々は少なくともそれを知ろうと欲するのである」(SZ 87)。

→学問的欲求(あるいは真理への意志)からの離脱。あるいはそれをまったく自明でないものとして受け取り直す技法としての隠喩学=人間学(文化哲学的伝統への特異な接近)。

凡例

ブルーメンベルクの著作については以下の版を使用し、引用の際にはそれぞれ略号を用いて頁数を指示する。

PM *Paradigmen zu einer Metaphorologie*, Suhrkamp, 2013.

TU *Theorie der Unbegrifflichkeit*, Suhrkamp, 2007.

SZ *Schiffbruch mit Zuschauer*, Suhrkamp, 1979